

NOV. 2 1. 19

NOV. 2 1. 19

左伯安談

第百号

「鄉土史研究」誌  
通算百三十二号

昭和五十年五月廿一日發行

事務所 伯史談會

所感

佐伯史談第百号の刊行

佐伯史談会  
會長 高木嘉吉

佐伯史談の第百号が刊行されることは、郷土史研究にとってまことに同慶の次第である。

頗るみると昭和三十三年三月、鶴岡地区の同好者によつて、まず「鶴岡郷土史研究会」が発足し、その推進によりつて、三月十六日龍護寺で「佐伯史談会」を結成した。そしてこの二つの会は、機関誌として「郷土史跡」と題する、僅か四ページのまことに粗末なものを四月五日に発行し、八月の第五号から「郷土史研究」と改題した。

以来、一郷土史研究は、大体毎月発行され、二十二号までづいたが、事情があつてその定期発行をしばらく休止した。しかし二つの会は停滞することなく成長し、昭

この時点で、実質的に一体となつていた鶴岡郷土史研究会と佐伯史談会の、二つを名乗る面倒さを排して、さらには佐伯市及び南海部に同志を求めて大同団結した。そ

して機関誌も改めて「佐伯史談」とし、その初号が発行されたが、昭和四十年の一月であつた。それから数えて十年、(会の発足からだと十七年)一定時発行しつづけ、毎月でちょうど百号になつた。「郷土史跡」「郷土史研究」から数えてと百二十二号になるが、この通算は今後も大事にしていきたい。

一口に百号とはいっても百号続いたことは、偉大な事実である。

「佐伯史談」に收められたものは、史跡・文化財などの実地踏査の記録、諸文献による郷土史実の究明、郷土史を中心とした種々の提唱など多岐にわたるが、いずれ

第百号、特集号、内容

所感 佐伯文政第百号の刊行（萬木舎長）一  
該書修復工事難感（清田義雄）一二

研究 佐伯歎建築考(小野英治)――七  
論 読海部と海人族(佐波賀)――九

前原町の吉瀬発掘（一）

續編卷之三

研究 黄川先生と佐伯國（山本保）一章

**蘇** 木部落共存林(混生林)一三  
金木交木交  
**蘇**(清松正人)一一四一

七  
血盆經塔(五代後梁)——四  
後  
塔三關鼎州(羽柴弘)——四

卷之三  
龍溪先生全集  
續編  
卷之三  
龍溪先生全集  
續編

年春の日向路へ（富沢泰）――堀  
道博故河野典一氏（羽柴弘一）  
行幸予表、安葬後吉、賛助等附

行事預告、清算報告、贊助寄付  
會費領收、會員消息、

も熱心な会員の研究による、珠玉の文章であると自負している。

佐伯地方の郷土史研究について、これほど豊富な資料は、いまだかつて記録提供されていないし、將来も刊行されることはないであろう。「佐伯史談」は、それほど貴重なものに成長した。百号の發行を祝福するゆえんである。今後も号を重ねて、さらに開口を広げ、奥行き深めたいと念じている。

それにしても、ガリ版切り、印刷、製本を、長年月にわたり殆んど一手に引き受け、うむことなく史談發行をつづけている、羽柴幹事の努力と教意と謝意を表したい。同幹事が益々健勝で、やたら史談の号を重ねることを願っている。

ローマは一日にして成らずといふ。「佐伯史談」また然りである。今後も会員全体でこれをばぐくみ育て、さらば充実した記録として後世に残したい。

「佐伯史談」第百号の刊行にあたり、温故知新の旅十八年を回顧して感慨無量である。私もまた老骨にむちうつて、「佐伯史談」を愛育しようとした決意を新たにしている次第である。(おわり)

## 記録

櫓門修復工事稚感  
会員 清田義雄

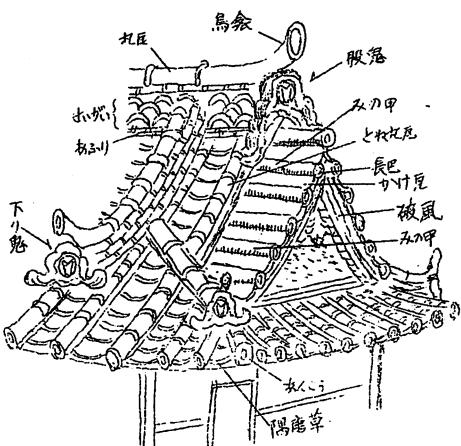
## 【櫓門 西切妻と庇】

日本の建築と屋根

が美しい。

木の心がもつてゐる彈力・柔らさ・温かさを、かばうようだ、三

角の屋根が覆つてゐる。木の心と土の心とを融合した表情が、建物の顔として造り出され



佐伯觀光では、そく眼玉にも考えられる櫓門は、佐伯城の正門であつたが、今は文化会館

の表玄関でもある。大半矢倉のない今は、この城山の頬でもある。これが、屋根一面雜草の繁るにまかせ、東北の隅の鬼瓦も隅唐草もこわれ落ち、軒先もは垂れが目立つたままに放置されていた。

たまゝかねて一部の人達によつて昨年六月、その修復を計画したところ、多くの方々から淨財が次々と寄せられた。そこで十一月から修復工事にかかり、この四月全工事の竣工を見ることができたことは、本当に嬉しいことである。起工から完成まで現場につめて、逐一その工

## 佐伯史談会の概要

○「密足」昭和三十三年三月十六日 龍護寺で集成總会(せ二名出席)

会長 故柴田勝実

発起・推進 鶴岡郷土史研究会

会長 泉由藏

外故庄蔵武夫 故高野喜善

米田惣吉 故若村吉祥

平田幸市 羽柴弘助

普通会員 二一八名

贊助会員 一三五名

会友 三四名

令計 四一二名

○「佐伯史談」印刷部数(第百号) 四五二部